

三日月地帯→カフカスへ

家畜ヤギ持ち込む

西アジア北部のカフカス（コーカサス）地方で八千年前に飼われた家畜のヤギは、約三百キロ南の農業発祥地とされる「肥沃な三日月地帯」から来たことが、名古屋大などの研究グループの調査で分かった。三日月地帯から各地へ農業が広まった説の有力証拠になるとみている。

三日月地帯はチグリス、ユーフラテスの両河川に沿うメソポタミア地方から地中海沿岸まで三日月形に広がり、土地が肥え古代文明が栄えた地で知られる。

グループは、農業の普及経過を突きとめようと二〇〇八年から、カフカス南部のアゼルバイジャンにある古代農村跡「ギョイテペ遺跡（紀元前六〇〇〇〜同五五〇〇年）」などで発掘調査した。保存状態の良い当時の家畜のヤギの骨が見つかり、難しいDNAの採取に成功。血統などを調べた

名大など 農業起源解明へ前進



8000年前の家畜ヤギの骨が見つかったカフカス南部の古代農村跡「ギョイテペ遺跡」＝研究グループ提供

結果、三日月地帯の家畜のヤギに起源を持つ系統と判明した。一方、カフカス南部で生息する野生のヤギとは別の系統だった。

二千年ほど早く農村文化が発達した三日月地帯で家畜化したヤギが持ち込まれ、定着した可能性が濃厚になったという。

三日月地帯とカフカス地方は、出土した土器や石

器、住居跡の共通点が多く、住民交流があったと考えられている。グループの名大博物館・大学院環境学研究所、門脇誠二講師は「当時のコーカサスの農民にとって、周囲の野生ヤギを家畜にするより、三日月地帯で飼いなされたヤギの方が手取り早かったのではないか」と話す。成果は米科学誌に掲載された。

カフカス（コーカサス）地方



肥沃な三日月地帯